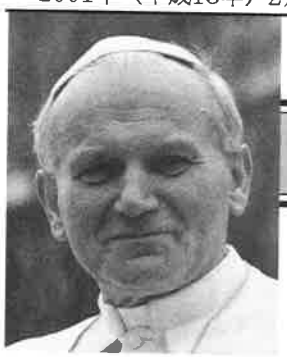
2001年（平成13年）2月10日発行　第250号　（昭和５９年１０月１日第三種郵便物認可）



教皇様の聲 2 250号

Libreria Editrice Vaticana,Citta del Vaticanoの転載許可済 2001

新しい千年期をキリストから始めよう

〔2000年最後の夜のお話。〕

1 まもなく2001年が訪れ、キリスト紀元三千年期が始まろうとしています。真夜中に鳴り響く鐘の音は、歴史的な時をしるすものですが、その音に合わせて立ち止まり、感謝の気持ちでいっぱいにしながら、この百年そして千年間の出来事の移り変わりをじっくりと考えましょう。悲しみと希望、喜びと苦しみ、勝利と敗北、すべて人間の出来事は神が導いておられます。神は人間と共に歩み、絶えず偉大なことをなさいます。今日のこの夜、神に感謝せずにおれるでしょうか。神について次のように繰り返さずにはいられません。「神よ、あなたに信頼します。そうすれば永遠に恥じ入ることなどないでしょう。」

2 大聖年中、一日一日をいつも特別なものにしてきた祈りの集い、2000年最後の夜である今も行われているこの集いを終えるにあたり、私たちは人間の救い主、キリストをじっと見つめます。キリストなしには、生命は最終的な目的に到達しません。キリストこそ、その賢慮と聖霊の力で、新しい千年期の挑戦に直面できるよう私たちを助けてくださる方です。私たちが神の栄光のため、人間の善のために生きることができるよう取り計らってくださるのもキリストです。もう一度キリストから始め、待ち受けている未来にも、キリストを証しする者となるべきです。

キリストの愛に近づきましょう。そうすれば人生の旅路で、日々忠実にキリストに仕えることから得られる喜びを知ることができるでしょう。これは私の心からの願いであり、信じる皆さんとすべての善意の人々にお伝えしていることです。苦しんでいる人、困難な状況にある人、悲しんでいる人へ今、祈りと共に特別の思いを送ります。一人ひとりに主の摂理的な助けがあるよう願っています。

私のまなざしは今や全世界に広がっています。新しい千年期が国々に平和と正義、兄弟愛と繁栄をもたらすこととなりますように。若い人たちのことを考えています。若者は未来の希望です。救い主キリストの光が、若い人々の生活に意味を与え、人生の旅路で導き、真理の証人となり、善に仕えることを証しする強さを与えてくださいますように。

これらの願いを聖母の取り次ぎに委ねます。

新しい時代の夜明けである至聖なるおとめよ、私たちが信仰の目で、過去の歴史とこれからの新しい年を眺められるようお助けください。

三千年期の星よ、キリストに向かう私たちの歩みをお導きください。

「昨日も今日も永遠に」生きるお方、人類が不安に負けず、新しい千年期に向かい、さらなる兄弟愛と一致を得られるよう取り計らってください。

皆さんにとって素晴らしい一年でありますように。

(2000.12.31)

第一の義務は祈り

〔教皇様は召命を増すために第一にすべきことは祈りであるとお話しになった。〕

1 洗礼によって私たちの心は周りの人々へ向けられるようになります。それは福音宣教への呼びかけです。（・・・）キリストご自身の心からの心配はこれです。「収穫は多いが、働き手が少ない。」（マタイ9・37、ルカ10・2）イエスのこの言葉が今の時代にぴったりであり、急を要することを感じずにはおれません。主の「収穫」には際限はありません。教会の司牧に関する必要性と同時に、実に多くの人がいまだに福音の知らせを聞いたことがないことを考えれば「収穫」に終わりがないというのは当然のことです。複雑な現代のまっただ中で、新しい千年期が始まろうとしている今、認識すべきことは、生きる意味を探し求める人々が増えつつあるということです。人々は沈黙のうちに探求しているのです。若い

人たちや文化、現代の倫理的社会的挑戦の中で、言葉には表れないものの、キリストを求める必要が感じられています。このような必要性に応えるために、教会は徹底的に仕えるものとなる必要があります。また、教会が使者と証人の共同体となること、収穫のための働き手が教会のために大勢出て来ることも必要です。

2 「収穫の主」はまさに神ご自身です。神は働き手をお選びになりますが、その呼びかけはいつも受けるにふさわしくないように思われ、予期せぬものです。しかも私たちは、神と結んだ契約の神秘によって、神のみ摂理に協力し、私たちの手に委ねられた祈りという力強い武器を使うよう求められています。このことはイエスご自身がお求めになっていることです。「収穫のために働き手を送ってくださるように、収穫の主に願いなさい。」（マタイ9・38）（・・・）召命を促進しなければなりませんが、何よりもまず祈りに献身することを忘れないでください。絶え間ない、安定した、信頼に満ちた祈りをしてください。祈りは神の心を動かします。それは召命の問題を解決する力強い鍵です。同時に、召命のための祈りは生命の学校でもあります。そのことについては最近指摘する機会がありました。「召命のために祈ることで、福音の知恵をもって世界と主と命と救いを必要とする一人ひとりを眺めるようになります。それはすべての人に対するキリストの愛と思いやりを共有する方法です。」（「第38回世界召命を求める祈りの日でのメッセージ」6番、2000.9.14）

3 祈りと共に、召命を育てるという仕事も絶え間ない努力を要するものですが、人々の注意を引くためには個人的に証しすることが必要です。そうすれば、神に呼ばれた人々は、すぐにその呼びかけを耳にすることができ、そして寛大に応えることができるでしょう。本物の召命の文化を広めることを目指しましょう。

キリスト教共同体は、召命を促進することが単なる計画以上のものだということを早く理解しなければなりません。これはまさに教会の神秘に触れることです。実際、召命というものは、キリストの体である教会の意義と関わるものです。教会はたくさんの賜物を備えた聖霊によって形作られ活気づけられています。第二バチカン公会議によって次のことが思い出されることとなりました。「キリストの体の建設においても、それぞれ部分と職務の相違がある。霊は一つであって、その豊かな富にふさわしく、また役務の必要に応じて、教会の益のために、いろいろのたまものを分け与える。」（「教会憲章」7）神の民には、それぞれに特別な使命が待ち受けています。「収穫」の必要性は本当に大きなものなので、神の民は皆「呼ばれる」のを待ちながら、成長しなければなりません。ここで重要になるのは、現実の事柄に関わるキリスト者の仕事とそのようなキリスト者に与えられている賜物です。このような仕事や賜物はとりわけ信徒の持つ責任に関わってきます。とはいえ、信徒だけでなく司祭も修道者も皆、司祭や奉献生活をする人、つまり教会共同体の聖性の深まりを導く人の召命のために責任を負っているのです。（・・・）

汚れないおとめ、母であるマリアの取り次ぎを願い、皆さんにあふれる恵みが与えられるよう心からの祝福を贈ります。　(2000.12.7)

マリアにおける愛の勝利

〔無原罪の聖マリア像の前で行われた教皇様のお話。〕

今日十二月八日、再びローマ市民は心を込めて巡礼を行い、この歴史的なスペイン広場へやって来ました。福者ピオ九世は1856年、ここに聖母の記念碑を建てることを望まれました。この記念碑は、無原罪の御宿りの教義公布を記念するものです。私たちは至聖なるマリアに敬意を払います。マリアは、まさに初めの瞬間より原罪の影響から守られており、罪のわずかな印からも守られていました。聖母が罪から守られていたのは、その御子イエス・キリスト、唯一の救い主の功績によるものです。毎年行っているように、神の母の汚れなきみ心に対して、この伝統的な花の捧げ物を贈りたいと思います。花の贈り物は、マリアに対する一致した信頼を力強く示すしるしです。

大聖年に関連して、教会が宣言し宣べ伝える信仰の真理は、今日特に明快に鳴り響きます。「お前と女、お前の子孫と女の子孫の間にわたしは敵意を置く。彼はお前の頭を砕き、お前は彼のかかとを砕く。」（創世記3・15）希望を告げる預言の言葉は、歴史が始まる時から鳴り響いています。預言されている勝利は、「女から生まれた」（ガラテヤ3・15）イエスが、この世の王子である悪魔を打ち負かすというものです。「彼はお前の頭を砕き…」、御子の勝利は聖母の勝利です。聖母は主の汚れなきはしためであり、あわれみの弁護者として私たちに取りなしてくださる方です。これこそ今日私たちが祝っている神秘です。信仰をもってマリアの記念碑の足下で新たにする宣言こそこの神秘なのです。ローマは歴史と文明の発

「パドレの思い出」福者ホセマリア・エスクリバーの第一の証人である最初の後継者とのインタビュー。福者の愛にあふれた生き方を紹介します。千五百円（税抜価格）

（昭和５９年１０月１日第三種郵便物認可）

祥の地であり、ペトロとその後継者の教座として神がお選びになった場所です。数多くの殉教者と信仰の証人によって聖化されたそのローマは、今日、全世界のために両手を広げています。ローマはカトリック信仰の中心で、五大陸に散らばるキリスト者を代表して次のことを示し、喜びに満ちた信仰をもって宣言します。「マリアよ、あなたによって愛が勝利を得ました。」

「お前と女、お前の子孫と女の子孫の間にわたしは敵意を置く。」創世記のこの神秘的な言葉は、全人類の歴史の劇的な真理を総括するものではないでしょうか。三十五年前、第二バチカン公会議は会議の閉会にあたって、次のように思い起こさせました。歴史とは根本的に「やみの権力に対する苦しい戦いであって、それは人間の歴史全体に行き渡っている。それは世の初めから始まったものであり、最後の日まで続く。」（「現代世界憲章」３７）この絶え間ない戦いは、全人類を巻き込みます。「善から離れないためには常に戦わなければならず、神の恩恵の助けと大きな努力なしには、自己の統一を実現することも出来ない。」（同上）

汚れなきおとめ、救い主の御母よ、いつの時代も、あなたが母として現存なさり、歴史の旅路を歩む巡礼者を支えてくださることを告げ知らせています。あなたに目を向け、悪との戦いの中で、また善を行おうと努力するときにも支えてくださるようお願いします。まったく汚れのない完全に聖であるおとめよ、あなたの母としてのご保護のもとで、私たちをお守りください。あなたのように謙遜に新しい千年期へ向かって歩みを続けることができますように。神が聖母をとりわけお愛しになったのはその謙遜をご覧になったからです。大聖年の実りを無駄にしませんように。私たちを待ち受ける未来をあなたの手に委ね、全世界をあなたが絶えず守ってくださるよう心から願います。そして使徒ヨハネのように私たちの家にあなたをお招きしたいのです。（ヨハネ19・17参照）

マリアよ、私たちと共に、いつも共にいてください。主イエス・キリストへ向かう私たちのために祈り、取り次いでください。アーメン。（2000.12.8）

「神に『はい！』と答えた人の物語」福者ホセマリア・エスクリバーの生涯が五十のエピソードで紹介されています。千二百円（税抜価格）

ご聖体、完全ないけにえ

〔ご聖体についての第三回目の要理講話。私たちの救いのために命をおささげになったキリストは、今でもご聖体においてご自分の命を与え続けておられることについてお話しになった。〕

1 「キリストによって、キリストとともに、キリストのうちに、全能の神、父であるあなたに、すべての誉れと栄光は、世々に至るまで。」三位一体を称えるこの宣言は、聖体祭儀の奉献文を締めくくる祈りです。事実、聖体は、完全で「賛美のいけにえ」、地上から天に昇る最良に栄光を帰する秘跡です。「キリスト教生活の泉であり頂点である聖体の祭儀に参加して、（神の子らが）神的いけにえを御父にささげ、同時に自分自身をもささげる。」（「教会憲章」１１）新約聖書のヘブライ人への手紙はキリスト教の典礼を示していますが、この典礼は「聖であり、罪なく、汚れなく、罪人から離され、もろもろの天よりも高くされている大祭司」によってささげられるものです。この大祭司は「ご自身をささげること」によって一度限りの唯一のいけにえを達成なさいました。（ヘブライ7・26～27参照）ヘブライ人への手紙にはこのようにも書かれています。「イエスを通して賛美のいけにえを絶えず神に献げましょう。」（ヘブライ13・15）それでは今から、聖体について、いけにえと賛美という二つの面から一緒に考えて行きましょう。

ご聖体はあがないのいけにえ

2 まず初めに、キリストのいけにえが聖体に現存することについて考えてみましょう。イエスがパンとぶどう酒の外観のもとに現存なさることはうそではありません。イエスご自身が保証しておられます。「これはわたしの体である。これはわたしの血である。」（マタイ26・26、28）しかし、聖体に現存するキリストは今は栄光をお受けになったキリストです。聖金曜日に十字架上で自らをささげたキリストなのです。杯についておっしゃった言葉によって、このことが強調されています。「これは多くの人のために流されるわたしの血、契約の血である。」（マタイ26・28、マルコ14・24、ルカ22・20参照）聖書の意味を考えながらこの言葉を考察すると、二つの意味深い部分が浮かび上がってきます。一つは「流される血」についてで、聖書の言葉が証明しているように（創世紀9・6参照）、「残酷な死」を暗示するものです。二つ目は、はっきりした言葉で「多くの人のために」と書かれてある部分です。多くの人とは、御血が注がれる人々のことです。ここで、聖書のキリスト教的解釈の基盤となる部分であるイザヤの第四の歌が思い出されます。神のしもべは自分をいけにえにし、「自らをなげうち、死んで」、「多くの人の過ちを担」われました。（イザ

ヤ53・12、ヘブライ9・28、1ペトロ2・24参照）

3 聖体が示す犠牲とあがないについては、イエスの言葉にも示されています。ルカとパウロが記しているように、イエスは最後の晩餐でパンを裂くとき、このように言われました。「これは、あなたがたのために与えられるわたしの体である。」（ルカ22・19、1コリント11・24参照）ここでも神のしもべの犠牲的な自己奉献が触れられていますが、それ以前に次のような節がイザヤの書に記されています。「彼が自らをなげうち、死んで…多くの人の過ちを担い、背いた者のために執り成しをした」（53・12）「聖体は何よりもまず犠牲であります。つまり、贖いの犠牲であり、私たちが信じ、東方教会も声明している新約の犠牲でもあります。ギリシア教会は数世紀前に次のように述べています。『今日の犠牲は、実はかつて託身のみことばであるおん独り子をささげたそれのようなものである。同一の犠牲であるから、それはかつてのように今日も御独り子がおささげになる。』」（「聖体の秘義と礼拝について」9）

4 新しい契約のいけにえである聖体は、シナイ山で知らされた契約が発展し完成したものです。そこでモーゼは捧げられたいけにえの血を神の象徴である祭壇の上に半分注ぎ、集まったイスラエルの民の子孫にもう半分を注ぎました。（出エジプト24・5～8参照）この「契約の血」は、一致の絆で神と人とを密接につなぎ合わせるものです。聖体によってその親密さは完全なものとなり、神と人間との抱擁は頂点に達します。これは「新しい契約」の実現であり、エレミヤが予言していたことです。（31・31～34参照）霊と心の約束は、ヘブライ人への手紙で預言者の言葉を使ってはっきりと誉め称えられ、キリストによる唯一の絶対的な犠牲と結び付けられています。（ヘブライ10・14～17参照）

5 この点を考えると、もう一つのこと、つまり聖体は賞賛のいけにえであることについて証言することができるでしょう。聖体は、本質的に神と人との完全な一致を目指すものですから、「聖体のいけにえは、教会が行なう崇拝とキリスト者の生活の源であり頂点です。キリスト者はより完全にこの感謝と償い、祈願、賛美の秘跡にあずかります。これは、キリスト者が自ら、司祭を通して聖なるいけにえを御父にささげる時だけでなく、同じいけにえを秘跡的に受ける時にも当てはまります。」（現典礼秘跡省 Eucharisticum Mysterium ,n.3e）

ギリシア語の語源が示しているように、聖体（ユーカリスチア）には感謝という意味があります。聖体において神の御子はあがなわれた人間をご自分に一致させ、感謝と賞賛の賛歌を歌います。「賞賛」を意味するヘブライ語の「トダ」という言葉も思い出しましょう。これにもまた「感謝」という意味があります。賞賛のいけにえは、感謝のいけにえでもあります。（詩篇50(49)・14、23参照）最後の晩餐で聖体を制定するため、イエスは神に感謝をおささげになりました。（マタイ26・26～27参照）これが聖体（ユーカリスチア）の秘跡の名前の由来です。

生けるいけにえとして神に自分自身をささげる

6 「聖体のいけにえにおいて、神がお愛しになる全被造物が、キリストの死と復活を通して、御父にささげられます。」（「カトリック教会のカテキズム」1359）教会はキリストのいけにえと一致することによって、聖体において全被造物の賞賛を言葉に表わします。同じように一人ひとりは、自分の存在、そして聖パウロの言葉を借りるなら、自分の「体」を「神に喜ばれる聖なる生けるいけにえ」（ローマ12・1）として、捧げなければなりません。こうして一つの命によって神と人間は一致しました。これは私たちのために十字架に付けられ復活したキリストと、神に自分を完全にささげるよう呼ばれた弟子との一致です。

フランスの詩人ポール・クローデルはこの深い愛の一致を歌い、キリストの言葉をこのように表現しました。「私が今いるところ、あなたの中で私と共に進みなさい。そうすれば生命への鍵を与えよう。私が永遠にいるところは、あなたの存在理由を知る場所である。… 私のものでないあなたの手はどこにあるのか。同じ十字架に釘付けられていないあなたの足はどこにあるのか。私は一度だけ死んで復活した。私たちは互いにとても近くにいる。… 私の心を傷つけることなしにあなたが私から離れることなどできようか。」（‘La Messe la-bas’）

(2000.10.11)

「教皇様の聲」　ヨハネ・パウロ二世教皇の説教、書簡、講話等を解説なしにそのまま伝える月刊紙
■毎月10日発行　■**定価**：送料とも一部186円　■**年内定期購読**：送料とも一部2,087円（税込）
詳しくは、精道教育促進協会までお問い合わせ下さい。
財団法人■精道教育促進協会 〒659-0093兵庫県芦屋市船戸町12-6 TEL. 0797-34-5920
FAX. 0797-34-4920振替口座：01130-8-72393 財団法人 精道教育促進協会
＊電話受付時間は月・火曜日午前9：30～11：30、水曜日午後2：00～午後5：00、
木曜日午前9：30～12：00、午後1：30～5：00となっています。

キリスト者の祈り

「カトリック教会のカテキズム（試訳）」より

祈りとは何か

わたしにとって、祈りとは心のほとばしりです。ひたと天に向けたまなざしです。つらいときにも、うれしいときにも、天に向けて上げる感謝と愛の叫びです（幼きイエズスの聖テレジア「手記」C 25r）。

神のたまものとしての祈り

2559　「祈りとは心を神に上げること、あるいはふさわしい善を神に願うことである」（ダマスコの聖ヨハネ,De fide orthodoxa,3,24）。私たちが祈るとき、その祈りはどこから沸き出ているのか。高慢と自愛心の高みからか、それとも謙遜で悔い改めた心の「深い淵の底」（詩篇130・14）からであろうか。へりくだる者は高められる（ルカ18・9-14参照）。謙遜が祈りの基礎である。「わたしたちはどう祈るべきか知りません」（ローマ8・26）。謙遜は、祈りのたまものを無償で頂くために必要な心構えである。人は神の前では物乞いなのである（聖アウグスティヌス Sermones,56,6,9参照）。

2560　「もしあなたが神のたまものを知っていたら」（ヨハネ4・10）と、キリストはサマリアの女に言われた。祈りの素晴らしさは、まさにあの井戸のそばで明らかにされる。私たちもあの井戸に水を汲みに行くなら、それよりも先に私たちを探そうとしてキリストがそこで待っておられ、私たちに水をお求めになる。イエスは喉が渇いており、その声は私たちを慕う神の心の奥底から出て来る。祈りとは、私たちが気づこうが気づくまいが、神の渇きと私たちの渇きの出会いである。神は、私たちがご自身を渇望することに渇いておられる（聖アウグスティヌス De diversis quaestionibus octoginta tribus、64,4参照）。

2561　主はサマリア人の女に続けて言われた。「あなたの方からその人に頼み、その人はあなたに生きた水を与えたことであろう」（ヨハネ4・10）と。逆説的に聞こえるが、私たちが神にする祈願の祈りは、実際は神に対する応答なのである。「わが民は、・・・生ける水の源であるわたしを捨てて無用の水溜を掘った」（エレミア2・13）と嘆く生きた神への応答、救いを無償で約束する神に対する信仰の応答（ヨハネ7・37-39、イザヤ12・3、51・1参照）、御ひとり子の渇きへの愛の応答にほかならない（ヨハネ19・28、ザカリア12・10、13・1参照）。

契約としての祈り

2562　人間の祈りはどこから生まれるのか。祈りの表現（動作や言葉）がいかなるものであろうと、祈っているのはその人全体である。しかしながら、聖書は祈りがほとばしる場所を示すために、ときどき魂、あるいは霊、そしてもっと頻繁に（千回以上）心という言葉を使う。祈るのは心である。心が神から離れているなら、祈りの言葉はむなしい。

2563　心とは、私がいる場所、または私が住まう所（聖書のセム語的表現に従えば、「私が中に入る」所）である。心は、自分の理性によっても他人の理性によっても知り得ない、人間の隠された中心部である。ただ、神の霊だけがそれを探り知ることができる。それは私たちの心理的な動きの最も深い所で、意志の決定を下す場所である。また、生か死かを選ぶ言い訳のきかない場である。それは、神の似姿として、周囲との関わり合いの中で生きる私たちの出会いの場、すなわち契約の場所である。

2564　キリスト者の祈りは、キリストにおける神と人との契約である。祈りは神と人の行為であり、聖霊と私たちから出て、人となられた神の御子の人間としての意志に結ばれ、御父のもとに全面的に上って行く。

交わりとしての祈り

2565　新約時代においては、祈りは神の子たちが無限に善なる父と子と聖霊の神と結ぶ生きた関係である。神の国の恵みとは、「人間の全精神が三位一体とまったく一つに結ばれること」（ナチアンツの聖グレゴリウス,Orationes,16,9）であるから、祈りの生活とはいつも聖三位の神のみ前で神との交わりのうちに生きることである。この交わりの生活がつねに可能なのは、洗礼によって私たちがキリストとなったからである（ローマ6・4参照）。祈りがキリストの祈りであるのは、それがキリストとの交わりであり、キリストの神秘体である教会の中に広がって行くものである限りにおいてである。祈りは、キリストの愛が広がっていくのと同じだけの広がりをもつ（エフェソ3・18-21参照）。

（2566～2628省略）

2629　新約聖書での祈願を表す用語はニュアンスに富んでいる。そこには、願う、求める、しつこく叫ぶ、呼びかける、声を上げる、叫ぶ、時には「祈りのうちに戦う」（ローマ15・30、コロサイ4・12参照）などの表現が見られる。しかし、最も普通の表現は、「願う」という最も自然なものである。祈願の祈りによって、人は神との関係を意識させられる。つまり、私たちは神の被造物であり、自らの起源でもなく、逆境を支配することもできず、究極の目的でもない。しかも、罪人であって、我々の父なる神から離れること

を、キリスト者として知っている。祈願の祈りをするとき、すでに御父のもとに戻る第一歩を踏み出したのである。

2631 赦しを願うことは、祈願の祈りの最初の動きである（たとえば、徴税人の「神様、罪人のわたしをあわれんでください」ルカ18・13）。これは、正しく純粋な祈りの始まりである。私たちは信頼に満ちた謙遜によって、御父と御子イエス・キリストの交わりに、また相互の交わりに戻され、「イエスに願うことは何でもかなえられる」（1ヨハネ3・22）ようになる。感謝の祭儀も、個人の祈りも、まず赦しを乞い求める祈りから始まる。

2632 イエスの教え（マテオ6・10、22、ルカ11・2、13参照）に従って、キリスト者の祈願は、来たるべき神の国を望み求めることを中心とする。祈願すべきことには順序がある。つまり、第一に神の国、続いてそれを受け入れその到来に協力するために必要なことを願う。キリストと聖霊の使命、そして現在は教会が果すその使命に協力することは、使徒時代の教会が祈りで求めていたことである（使徒行録6・6、13・3参照）。卓越した使徒であったパウロもこのように祈り、いかに全教会への神的な配慮がキリスト者の祈りに浸透しなければならないかを示す（ローマ10・1、エフェソ1・16-23、フィリペ1・9-11、コロサイ1・3-6、4・3-4、12参照）。信者は祈るときに、神の国の到来のために尽くしているのである。

2633 このような仕方で神の救いをもたらす愛に参与するなら、あらゆる必要のために神に祈り求めるようになる。すべてをあがなうためにすべてを担われたキリストは、私たちがその御名によって御父に祈願をすることによって称えられる（ヨハネ14・13参照）。この確信をもって、ヤコボ（1・5-8）とパウロ（エフェソ5・20、フェリペ4・6-7、コロサイ3・16-17、1ティモテオ5・17-18参照）はあらゆる機会に祈るように私たちを励ましている。

執（と）り成しの祈り

2634 執り成しは祈願の祈りのひとつで、私たちをイエスの祈りに緊密に一致させる。イエスこそ、すべての人、特に罪人のために神に執り成す唯一の仲介者である（ローマ8・34、1ヨハネ2・1、1ティモテオ2・5-8参照）。イエスは、「常に生きていて、人々のために執り成しておられるので、ご自分をとおして神に近付く人たちを、完全に救うことがおできになる」（ヘブライ7・25）。聖霊ご自身も「私たちのために、・・・執り成してくださり・・・、神の御心にしたがって、聖なる者たちのために執り成してくださいます」（ローマ8・26-27）。

2635 他の者のために執り成し、懇願することは、アブラハム以来、神の慈しみに似た心の持主に固有のことである。教会の時代において、キリスト者の執り成しはキリストの執り成しにあずかり、諸聖徒の交わりの表れである。執り成しの祈りをする人は、「自分のことだけでなく、他人のことにも注意を払い」（フェリペ2・4）、自分を害する者のためにさえ祈るようになる（たとえば、ステファノはイエスのように、自分を殺す人々のために祈った：使徒行録7・60、ルカ23・28、34参照）。

2636 初代のキリスト者の共同体は、この執り成しの祈りを熱心に捧げていた（使徒行録12・5、20・36、21・5、2コリント9・14参照）。使徒パウロは、自分の仕事のために祈るように願うことによって、信者たちを自分の福音宣教に参加させた（エフェソ6・18-20、コロサイ4・3-4、1テサロニケ5・25参照）。彼はまた共同体のためにも祈る（2テサロニケ1・11、コロサイ1・3、フィリペ1・3-4参照）。キリスト者の執り成しには国境がない。つまり、「すべての人々のため、高官のため」（1ティモテオ2・1）、迫害者のため（ローマ12・14参照）、福音を受け入れない人々の救いのため（ローマ10・1参照）にも同じように祈るのである。

感謝の祈り

2637 感謝を捧げるということは教会の祈りの特徴である。教会は感謝の祭儀を挙行するとき、その本来の姿を示し、より教会らしくなる。事実、キリストは、救いのみわざにおいて、被造界を罪と死から解放し、それを御父の栄光のために再び聖別し御父の手に戻す。神秘体の肢体の感謝は、その頭の感謝に参与する。

2638 祈願の祈りにおいて、どのような出来事も、どのような必要も祈願の対象になるのと同じように、あらゆる出来事、あらゆる必要が感謝の対象になる。聖パウロの手紙は頻繁に感謝で始まり感謝に終わっており、感謝の中でつねにキリストが言及されている。「どんなことにも感謝しなさい。これこそ、キリスト・イエスにおいて、神があなたがたに望んでおられることです」（1テサロニケ5・18）。「目を覚まして感謝を込め、ひたすら祈りなさい」（コロサイ4・2）。